

くなってきましたが……。

その後いろいろありまして、昭和二十三年の十月二十九日に舞鶴に上陸して、八十過ぎの今日まで生き長らえています。帰ってきてしばらく、何十年も、夢を見るんです。せっかくソ連から帰ってきて日本に到着して、舞鶴に上陸した途端にソ連の警戒兵が出てきて、「おまえ、もう一回ソ連に行け」という夢を本当によく見ました。二十一年ぐらいは時々見ておりました。自分の体験としてもそれほどひどかったんでしょね。

抑留

埼玉県 菊田 鎮 男

戦前の私が特に頭の中に記憶していることが六
点あるんですね。その六点だけ簡単にちよつとお
話します。

まず第一点は何かといいますと、私は三重県の
部隊に入りましたので、名古屋の駅から大陸へ渡
ったわけなんです。名古屋の駅から名古屋城を見
ますと、昔は丸見えに見えたんです。今は何も見
えません。これが名古屋城は私の見納めである
ということ、まずこれが一点。幸いまた見られま
した。

それから次に、朝鮮からずっと入っていきま
すと、山海関というところがございます。山海関は
両方とも山になっていまして、その下を列車が通
るわけです。そこを通るときはもう日本軍は全部

完全軍装で、いつでも外へ出られるように銃を構えて通るわけです。このときの緊張感というのは、本当に列車に乗った人じゃないと分からないんじゃないかなと思います。これが二つ目。

それから三つ目は、上海の無錫飛行場におったときですが、これは戦爆連合で払曉に出発するんです。私も随分ニュース映画を見ましたけれども、実際の戦爆連合による発進というのは、もうニュース映画の比ではございません。これはもう永久に頭の中にあります。まず、薄暗いところで部隊長から「始動」と命令がかかりますと、戦闘機、爆撃機、一斉にエンジンがかかるわけです。ゴーとエンジンがかかって、それから離陸して、上空で編隊しながら全部組みまして、それで爆撃に行くわけです。その後は申しません。どうなったかは申しません。これはご想像に任せます。

その次には、四つ目としては、今度、私は上海から北支へ一人で赴任するときに、あの列車に乗ったら、蘇州、ご存じですね。上海の蘇州、これ

は米の出どころですけれども、これの夜行列車に乗ったら、新潟の雪国を夜行列車で通っているように、車窓が雪みたくにホタルが物すごいんです。まるで雪がどどん降っているようにホタルがいたわけです。これがまず印象に残っております。

それから五つ目は、北支の承德へ行ったわけですが、ここには太いアカシアの木がずっと並木になって、真ん中に通路があるんですが、その外れに芝生があるんです。それは宮庭の中ですけれども、そこは夜八時ごろになると、何となく兵隊がみんなそこに集まってくるわけです。そうすると、そのトンネルの中をアカシアのにおいがスーッと風に乗ってその広場へ流れていくんです。そこを仰向けになって月を見ながら何のお話をしたと思いますか。ほとんどがぼたもちの話です。お袋がつくったぼたもち。ぼたもちが食いたいな、その話しかないわけです。九時になると消灯でございますので、もう一時間ぐらいそういうぼたもち話をして、帰って寝る、これはもう非常に印象でし

た。

それからその次に六つ目です。これは蒙古の大
同へ行つたときです。大同の石仏をごらんになっ
た人はいると思いますが、大同の石仏というのは
すばらしいものです。それからもう一つはオオカ
ミの遠ぼえですが、これだけが非常に頭の中に印
象に残っております。

以上の六点でもって大体戦前というふうなお話
をしてみました。

次に、いよいよ本題のシベリア、終戦からのこ
とでございしますが、私はちょうど大同にいたとき
に、本土防衛のために九州の雁ノ巣へ行けという
命令をもらいまして、それからどんどん南下して
きまして、大連に行つたわけです。大連に行きま
したら、もう大連から船が出ると、すぐぼかっ
やられるので、それで大連でうちよろしている
うちに、もうしようがないから、それでは南満州
あたりで転回しろということで熊岳城におさま
つたわけです。熊岳城はどういうところかといま

すと、保養地です。温泉地帯。立派な保養所があ
りまして、砂地がずっとありまして、そこをスコ
ップで掘りますと、どこでもお湯が出てくるわけ
です。そういうとても風光明媚なところでした。
日本人が開拓したんでしょう。日本人の経営する
リンゴ畑がたくさんありました。そういうような
非常にいい、熊岳城というところは何ともいいと
ころでした。

以上、その六つを含めて最終の赴任地がこの熊
岳城。ここで終戦でございします。

終戦のときの話をちよつといたしますと、私の
本隊から約四キロ離れたところに被服倉庫があつ
たわけです。ちよつと私は被服倉庫をやつてい
ましたので、朝、食事をすると、町中を四キロ歩
いて被服倉庫へ行つたわけです。やつと着いたな
と思つたら、すぐ本隊から電話がありまして、す
ぐ戻つてこいということで、そのときには何だか
よくわからなかつたんですが、戻りましたら、玉
音放送ということでございます。その前に、「おま

え、一人で帰つてきたか」と言うから、「一人で帰ってきました」と。よく一人で大丈夫だったなと言われましたけれども、その時点では何が何だかさっぱりわからないわけです。それで、玉音放送を聞きまして、とにかく被服倉庫をそのままほったらかしておくわけにいかないので、また一人で戻ったわけです。戻ったら、毎朝毎晩そこを通っていますからやはりいつも顔なじみです。そうしたら、兵隊さんは二、三年たつたらまた来るよねと満州人が言っているわけです。それは二、三年で来るといったって、そんなことは我々はわかるわけではないし、適当に返事をしていました。それで、戻りましたら、倉庫の周りが黒山の人の人な感じですよね。やっと私は倉庫の中へ入りましたら、何を言っているのかといったら、マイマイ、マイマイと言っているわけですね。マイマイというのは、ご存じのように、売ってくれということでしょうね。売ってくれといったって、私はそんな売るだけの権利はないし、そのままにしていたんで

すが、それで、夕方、また帰ったときは私は全然襲われる心配はなかったわけです。それで、本隊に帰りましたら、将校・士官が襲撃されたということがいろいろ情報が入りまして、その次の日からはもう被服倉庫へ行くなということで行かなかつたから、あの被服、兵器が恐らく近所の満州人にみんな略奪されたんじゃないかと思えます。想像ですが。

熊岳城でそうこうしているうちに、十八日からソ連軍がどんどん南下してきました。南下すると、すぐ分かるんですね。我々の飛行場から、駅から約二キロぐらいですから、列車がぐうつとブレーキがとまりますと、もう町は阿鼻叫喚ですね。略奪か、あるいは強姦かわかりません。とにかく阿鼻叫喚です。我々は飛行場で耳をふさいでいた記憶がございます。そうこうしているうちに十八日に武装解除ということになりました。武装解除といっても、ソ連の兵隊は、武装解除をやるのがみんな十六か十七ぐらいの兵隊なんです。武装解

除で我々がどんどん銃、剣を山にするわけです。それで、全部丸腰になったときにソ連の歩哨が一人いたものですから、我々三、四人で行きましたら、ソ連の歩哨は逃げちゃったんです。小さいんですよ。こんな小さい十六、七の歩哨が一人です。逃げた、そういう思い出があります。

今、私が最も印象に残ったのは、板切れでできたベッドがございますね。あの二段ベッド。日本の製作みたいにびしょとくつついていないで、すき間があいている板。ですから、寝ても毛布一枚です。非常にも痛いし、大変でした。

熊岳城でそうこうしているうちに、今度は列車に乗れということで、列車に乗せられて、またゴトゴト、のろのろ走っていました、今度は蓋平というところに行ったわけです。蓋平でおりたら、昔の日本人が経営していたんでしょう、たくあん、三メートルか四メートルぐらいのたる、あれが幾つもあるんです。たくあんにおいというものは実に懐かしいにおいです。そのたくあん工場

で約一カ月ぐらいうろちよろしていましたか。何の仕事もしないで。そのそばにうまいお豆腐屋さんがあるというので、毎日お豆腐を買って食べていました。

そうこうして何にも仕事をしないうちに、今度は海城というところへ行ったわけです。海城へ行きましたら、今度は仕事はいっぱいあります。何の仕事かといいますと、ソ連が運ぶバレイシヨを毎日毎日貨車に積み込むんです。結局、考えてみたら、我々がシベリアへ行って、そのバレイシヨによって食べていたわけです。それで、駅にはレングみたいなものが山積みされているんです。あれは何だろう、建築資材にしては変だなと思ったら、あれがいわゆるソ連の黒パンというやつなんです。エン麦でつくったパンですね。それをソ連へ行ってから初めてわかったわけです。それから、海城で盛んにバレイシヨ、あるいはニンジン、大根、ありとあらゆるものをどんどん積んで、それがどんどん向こうへ運ばれて、あるいは大連まで

南下して、大連からソ連の船で運ばれたというところでございます。

そこで将校、下士官、兵というふうには全部分類されまして、いよいよ海城を出発しまして、四平街というところまで行ったわけです。四平街へ行ったら、レールがありますね。我々の列車が行きましたら、隣にスターリンのマークのついた列車がダーツと横づけになっているんです。だけれども、これは最初から日本人は、日本軍はすぐ日本へ帰るんだ、日本はもう食糧がないから、いっぱい持てるだけ持てというふうに言われたわけです。だから、世帯持ちの人は軍用毛布二枚分、一生懸命こうやって針と糸で縫い合わせまして、二枚という大きな布です。そこへ米だ、みそだ、砂糖だ、いろんなものを入れて結わえたけれども、一人で持てないですよ。我々がこうやって持って、やっそこすつとこ積んで、積んだら、何のことはない、全部赤い列車に積みかえて、どんどんどんどん南下してしまう。

その途中で、いろんな方が証言されているように、どんどん兵隊が逃亡したわけです。私の方の列車も、最初は海城で寝るときは貨車の中はぎゅうぎゅうでしたが、もう共産八路軍が、貨車に少し窓があいているんですが、そこからとびぐちみたいなやつで、こうやって日本軍のものをかっぱらおうとするんですけれども、かっぱらおうとしても、人がいっぱいでもうにもならなかった。ところが、四平街に着きましたら、中が悠々になっちゃった。まず恐らく半分ぐらい逃亡したんじゃないかと思う。私なんか、中国語、いわゆる満州語ですけれども、しゃべれないし、ここで逃亡したって、まずだめだろう。それなら、みんなと一緒にいた方がいいだろうということで、ずっと我慢して赤い列車に乗ったわけです。

それで、赤い列車に乗る前に、ちよつと熊岳城の話をかかのぼってささせていただきますと、終戦が十二時ですよ。夕方までに全トラックに糧秣を全部積んで、完全軍装して南朝鮮まで突っ走る

んだということで、全員トラックに乗って出発しようと思ったら、部隊長が「待て」と、こうやったわけですね。部隊長は上から何にも命令をもらっていないのですから、終戦といっても、まだ部隊長の命令は聞かなくてはいけない。それで、それは取りやめになった。

取りやめになったら、今度は私に、私は本部にいましたものだから、本部の将校が、「菊田、おまえ、一緒におれと二人で入院しろ」と言うわけです。熊岳城の陸軍病院へ入院しろと。こっちもほかですね。もう元気いっぱいですから、いや、自分はどこも悪くありませんというふうにしたなら、「そうか、じゃ、しようがないな」と、自分だけ入院したわけです。よく考えてみたら、ソ連は働く人以外は連れていかないわけです。働けない者を連れていったって、飯を食わせるだけだから。だから、入院患者は、白い着物を着た人は帰れたらしいですよ、後で聞いた話ですけども。まず私はほかでした。

それから、その次の日、今度は百式司令部偵察機、これがちよっと七、八機給油しに出たんですが、そこで、この部隊は何人いるんだと言うから、六十人ぐらいですと言ったら、全部乗れるから乗れと言ったら、それも部隊長は命令をもらっていないんだから「だめだ、待て」と。それで飛んで行っちゃったんですね。それで、あげくの果てに、うちの部隊の上の司令官は地区司令官と言うんですが、地区司令官になると自分の専用機を持っているんです。おわかりですね。専用機ですよ。専用機で内地へ帰っちゃったわけです。だから、命令なんか来やしないですよ。それがわかったときに、私のところの部隊長は一メートル九十センチぐらいで、体重は九十キロぐらいあるんですよ。私が二番目だったんですが、その部隊長が軍刀をこうやって、「あのやろう、内地へ帰ったらぶっ殺してやる」と言っていました。そこでそんなことを言ってももう遅いですよ。もう相手は帰っちゃっている。それで、とうとうみんな十八日に武

装解除を受けて、先ほどの転々として、とうとう四平街まで行ってしまったわけです。そこで赤い列車に乗りかえまして、スターリンの肖像画がついた列車を先頭に、一挙にダーツと突っ走った。それでソ連領に入っちゃったわけです。

ソ連領に入ったら、またコトコトコトコトのろいんですよ。国境を越えるときは速かったんですが。後でわかったことですが、まだ日本兵がつくっている、我々が入る収容所は完成していません。たんですね。そのために列車がとまったり走ったり、とまったり走ったりで、チタまで行くのが半月ぐらいかかっているんですね。なぜかといったら、その兵舎ができていなかったということが後でわかりました。我々の兵舎は半地下ですから、半分地下で、いかに寒いかわかりますね。

それで、このチタで行軍して駅から兵舎まで行く途中に、まず寒いんですよ。背中を丸めて歩いてみると、ソ連の子供がスケートでシューツ、シューツと列の間へ入ってくるんですよ。防寒手袋

なんか、首から垂らして、はめていなかったらすぐ持っていかれちゃうんです。かみそりでサーツと切って持っていかれちゃう。そういうようなことで往生しましたね。

それで、やつと着いて、のどが渴いて渴いて仕方がないので、雪がもう四十センチぐらいありましたから、飯ごうのふたで雪をすくって、そうしたら、顔にくっついちゃったんですね。やっぱり雪国の人だったらそんなことはわかるんでしょけれども、私らはわかりませんでしたから、くっついちゃって、引っ張っても引っ張っても取れないんですよ。しょうがないので、どうやってやるんだと言ったら、雪国の人が教えてくれて、暖かいところへ行かなきゃだめだよ、と。それで、ペチカのところへ行って温めて取った覚えがあります。二度とやりませんでしたけれども。そういうことを経験しました。

それで、収容所に入りましたら、さっきの板張りの収容所。寒いですよ。中は全部凍っているん

ですよ。そうこうしているうちに、二、三日たちましたら、仕事の割り振りをするんでしょうね。ソ連の、今で考えれば、恐らく政治将校だと思っただアから呼び出されるんです。一人ずつアから決められているんです。その前に捕虜番号が決められているんです。私の場合は一二四番です。ソ連語でストー・ドウヴァーツァチ・チテイーリと言うんですね。それで、入りまして、一礼しまして「ストー・ドウヴァーツァチ・チテイーリの菊田です」と言ったら「ハラショー」なんて言っていたんだけど、そのうちにだんだん職業です。一番先に職業です。やっぱり気持ち悪いですよ。将校が七人ぐらいずつと並んでいるところで一人ずつ呼び出されて「職業は」と言われたときに、やっぱり余りうそをつけないですね。ところが、幸いなことに私のうちは農家でしたものですから「農業」と言ったわけです。そうしたら、何と言いましたかといったら、「おまえはうそをついている。おまえのうそがばれたら」、地

面を指して「この中だ」と言うわけです。この中だと言われたって、農業だから仕方がない。そういう経験を三回やりました。三回同じようなことをやって「農業」「農業」と言いましたら、幸か不幸か炭鉱作業になりました。もちろん伐採だとか、いろんな作業があります。

ソ連軍は職業をなぜ調べたかといいますと、技術者が非常に少なかったらしいです。独ソ戦争に大分行かれちゃったから、一番優遇されたのは床屋さん、洋服屋さん、靴屋さん、とにかく手に技術のあった人は非常に優遇されて、いわゆる鉄条網の中にいなくて済んだわけです。我々は何ら能なしで、炭鉱ですから、農業ですから、鉄条網の中に入れられる。望楼が出ていて、そこに歩哨が警備していたわけです。そんなようなことで非常におっかない思いをしました。

今ちよつと行き過ぎましたけれども、到着した次の日の朝、全員ダモイだったわけです。ダモイというのは帰るということです。やっと重い荷物

を運んだら、あくる日の朝、全員ダモイだったの
で、また全部収容所から出されちゃったわけです。
何をやるのかと思つたら、荷物を全部そこへ置き
なさいと。その荷物たるや、千八百人ぐらいの荷
物というのはすごいですね。山です。それで、着
ているもの以外は全部没収されました。写真だろ
うが、お札だろうが、財布だろうが、とにかく着
ているもの以外は全部没収。それで、今度は一人
ずつ小さな小部屋へ入れて、女の軍医がいまして、
看護婦が一人いて身体検査だった。身体検査だと
いつて一人ずつ入ると、本当に素っ裸になるん
です。私は気象兵だったので飛行場にいたんです。
飛行場には吹き流しがあるわけです。吹き流しに
は白と赤があるわけです。だから、もうこれは危
ないから、何となく虫が知らせたのか、赤ふんに
していこうと。それで越中ふんどしをつくりまし
て赤ふんをしていったんです。行ったら、何にも
物を言わないうちにソ連の軍医が、ぱつと私の越
中ふんどしを外すんです。何をするかと思つ

たら、ぱつと赤ふんを頭へ巻きましたね。だから、
後で話をして、おれのふんどしはソ連の軍医の頭
の上へ乗ったよ、ふんどしがえらい出世した
ななんてばか話をしたことがありますけれども、
あの辺は赤の布というのは大事だったんです。

前後しますが、ソ連が熊岳城へ進出したときに、
ソ連の若い兵隊が手当たり次第に剣で梱包してい
るやつをあけるんです。あけて何でも口にしちゃ
うんですよ。アルコールの携帯燃料、あれも口に
したし、左巻きの蚊取り線香は食べちゃうし、何
でも食べちゃう。そのうちに一週間ぐらいしたら、
連中は小麦粉に砂糖を入れて油で揚げることを覚
えましたね。そうすると、今度はそれでドーナツ
みたいなものを揚げたやつを食べている。そうこ
うしているうちに私は熊岳城を出ましたから、ソ
連の兵隊もだんだんぜいたくになったんでしょ
うね。最初はそんな調子でした。女の兵隊は、日
本の朱肉がごきますよ。朱肉を塗ってみたり、
とにかくソ連の兵隊というのは程度が低いです。

もう何でも食べちゃおう。何でもつけちゃおう。そんなようなことがありました。

それから、ソ連に、向こうへ行ってからですが、日本の軍隊にセイコー舎の配給の時計があつたんです。一番簡単な時計なんでしょう。これを私は持つていまして、行つたら、ソ連の将校がそれを売れというわけです。これをゼンマイを巻いて売つたんです。たばこを七本かな、こういう袋で七本。そうしたら、二、三日したら、これはだめだと、動かないから返すからと返しに来たんです。将校ですよ。それで、また違う将校に売つて、またたばこをもらった。三回目には戻つてきませんでした。ゼンマイを巻くのを知らないんです。

「明日の朝、ダモイ」だといって全部出されたときに、兵隊が何人いるのか、員数検査をやつたんです。この収容所に何人いるのか、検査する予定だつたんでしょう。やつたんだけど、日本の流の計算をしたんですけれども、合わないんですよ。今度はどうしたかという、幼稚園の生徒み

たいに十人ずつ手をつなぎまして、一列、はい、次、こういうふうにやつて、また合わないんです。

今度は五人でやつて、また合わないんです。とうとうやめちゃいました。陸軍少佐、所長。日本の軍隊だつたら、千八百人ぐらいの人間だつたら二列横隊でダーツと並んで、ばばばとすぐできるのに、あの連中、将校さんが合わないですよ。ですから、私の収容所では本当に実数何人いたかわからない。

満州から持つていった泥だらけのジャガイモ、これがそのまま倉庫へ入っているわけです。ところが、向こうは水を買うわけですから、水が貴重品なわけです。ジャガイモを洗っている水なんかないわけです。ですから、それを炊いてやわらかくするために、こんな大きな釜に水をぎつと入れて、泥だらけのジャガイモをだだだどと入れて、それを炊いてやわらかくするだけです。それはスープです。泥水スープ。それで、日本のマッチ箱、あれを二つ合わせたぐらいの黒パンが一個、一日

にですよ。だから、日本の兵隊はたちまちのうちにどんどんどんやせました。

私のいた炭鉱は二十四時間を三交代でやったわけです。私はちょうど二番方と言いまして、夕方四時から夜中の十二時まで。比較的楽な時期だったんですけれども、そこでもうしまいには階段を上するのに、足を持ちあげないと、上にながれないんですよ。兵隊と兵隊が階段でぶつかって両方倒れるんです。でも、炭鉱の穴の中に入るとぴしっとするんです。人間の精神力ってすごいものです。それで、炭鉱の柱がミシミシシツ、石炭がガタガタガタツとおっこちているところでも、やっぱり一人ノルマが八トンです。ソ連の独ソ戦争の捕虜一人と私ら抑留者は四人、五人が1チームなんです。五人で一人八トンですから四十トンですよ。四十トンをつろつろ運ぶのがノルマなんです。日本人は頭がいいですから、最初のうちはこの爆破された石炭をうまく積んで、たちまちつろつろをいっぱいにして送り込んだわけなん

ですが、途中でつろつろが地上へ行くまでにとろとろとろ行くうちに、だんだん石炭は沈んでいっちゃう。ですから、百トン貨車で百杯分つろつろに石炭を入れれば、百トン車がいっぱいになるようなシステムがある。日本もそうでしたよね。上に高いところにつろつろで上げると、下に貨車がいっぱい、そこでいっぱいになる。ところが、四十杯入れてもいっぱいにならないんですよ。日本人はざるをしてるから、半分しかいかない。そのうちに親方に怒られまして、日本人はヒートリールだ、ごまかすばかりだと。それからまじめに入れるようになりましてけれども。そんなことをやっているうちに、毎月毎月、今月のハラショーラポーターというのが発表されるんです。二十人ぐらい発表されるんです。今月のハラショーラポーターはだれだと、ずっと名前を書かれて。幸か不幸か、私の名前は毎月書かれましたね。

そうこうしているうちに、一人脱走したんです。どうせ脱走するなら満州にいるうちに脱走すれば

いいのに、ソ連へ行ってから脱走したってどうにもなりませんよ。たちまち撃ち殺されてね。その撃ち殺された兵隊はどうやってその収容所へ帰ってきたと思いますか。想像もつきませんよ。全員私ら集合をかけられて、おまえらも脱走するとあなるんだと、全員が見ている前で、向こうの山から兵隊が馬に乗って、馬のおしりに人間の脱走した兵隊の足をくくりつけて、それで走ってくるんです。顔がこんなになっているわけですね。それをずっと見ていて、いよいよ収容所の中へ入ってきて、みんなの前で、おまえたちも脱走するところなるんだと。向こうは見せしめのためにやっているんでしようけれども、こっちははらわたが煮えくり返りますよ。脱走するのは悪いかもしれないけれども、何もそこまでやる必要はない。どういうことをやったのかと思ったら、空腹で耐えられないので、ロシア人のうちへ入って何か物色したらしいんですね。それで密告されて見つかったしまったということらしいんです。それで、一

人銃殺で犠牲者が出ました。

そのほかには病気で、炭鉱で夜中の一時ごろに帰ってきて、板の上にごろっと寝ます。そうしたら、朝食、いわゆる泥水スープが上がったときにだれも起きてこない。何で起きないんだ。オーイと言うと、もう亡くなっている。そういう状態でした。ですから、死亡者は通称六万人と言っているけれども、実態は本当にもっと多かったんじゃないかと思えます。

最初はこっちもある程度元気があったから、一番最初の人は腕をなたで落として焼却したんです。だけれども、そのうちにそういう元気がなくなっちゃって、それで埋めたんですけれども、どこへ埋めたかも全然わかりませんよ。埋めるのも、石炭を二十四時間灯して地面を温めても、一ミリぐらいしか穴を掘れないんですから、凍土ですからね。石よりかたいんですから。そういうところでは一人埋葬するというのは容易なことじゃない。

そうこうしているうちに、栄養失調でも最も悪

い「オカ」という、いわゆる病院ですよ。オカというところが出来まして、私もオカへ行くのかなと思つたら、私はオカへ行かなかつたです。では、一体オカへ行かない体はどんな人か。全員裸になつたときに後ろから肛門が全部見えるんです。栄養失調で肛門が全員見えるんです。だけれども、まだオカへ入れてくれるような状態じゃないというんでしょうね。私なんか、とうとうオカへ入らないうちに終わりました。

だから、本当に人間というのはすごいものですね。あれだけのものを、もう内地へ帰りたいという一心なんでしょうね。結局、オカへも入らず、ハラショーラポーターのおかげかどうかは知りませんが、昭和二十二年の四月の中ごろでしたか、ソ連の将校が夜中にやってきました。やってきたのは私は知らないですよ。炭鉱場明けて寝ていたわけですから。そうしたら、流暢な日本語で「キショー、キショー」なんて言つて盛んにソ連の将校がやっているんです。何だろうと思つ

たら、今から名前を呼ぶ者は入浴と散髪をして午前五時に營兵所の前に集まれということ言われまして、いやあ、おれもいよいよ伐採かな。伐採へ行つたら命はないなと思つていたけれど、とにかく入浴と散髪ができればいいかてなもので、一応やつて五時までに行つたわけです。そうしたら、案の定、アメリカのジープが二台待っているんです。これに乗れというわけ。乗つたら、もう山々、丘から丘、どんどん入つていった。最後に林の中に入つていったんです。これはだめだとあきらめたら、林の中に兵舎がある。兵舎があつて、二階建てのいわゆる昔の陸軍の我々の兵舎と同じような兵舎があるんですよ。そこはもう寝台もベッドもちゃんとしている。そこへ入りましたら全然仕事をさせないんです。給与もいいんです。何だ、気持ち悪いなと思つて、よくよく考えてみたら、後でわかつたんですが、ナホトカで復員させる前に、余り肛門が見えるような栄養失調じゃぐあいが悪いので、少々膨らませようということでした。

へ入れたらしいんです。そこで約十日ぐらいいましたら、いよいよダモイよと言うわけです。ダモイだと言うんだけど、ソ連には最初からうそをつかれていますから。うその連発ですから、まだ信用できません。

それで、そのソ連の宿舎のところから列車に乗りまして、これは一週間ぐらいかかりましたかのろのろのろのろ走って。そのうちに海が見えたんですよ。海はもう朝鮮海峡を渡って以来だから、これは懐かしいわいと思っていっているうちに駅へ着きましたら、ナホトカという、いわゆる日本軍がそこから乗船する港なんです。そこに兵舎があるわけです。その兵舎も必ず二泊三日するんじゃないんです。ここの第一番目で「反動者」がいなければ、今度は第二へ進めるわけです。第二の兵舎で「反動者」がいなければ、今度は第三に進めるわけです。第三の兵舎に行けば、ほぼ乗船は間違いないらしいんです。私のところは幸運にも「反動者」がだれも出ませんでしたから、いよいよ

よ四日目の朝、乗船ということになったんです。乗船の港まで徒歩で行きましたら、豪華船はあるんですけども、日本の日の丸のついた旗は一向にないんです。どんだんあのナホトカの長い港を歩いていったら、一番奥にさびだらけの船が、真つ黒によれよれになった日の丸を後ろにぱつと掲げている。もう本当に見える影もないような船。私は名前を忘れちゃったんですよ。何という名前だったかね。高砂丸だとか何とか丸、いろいろあったんでしようけれども、私は名前を忘れちゃいましてね。調べればわかるよなんて言われていましたけれども、結局、何丸だかいまだにわかりません。そうしましたら、やつとこすつとこ端っこにいましたら、乗ったんです。乗りましたら、乗ったとき、どうなりますと思いましたが。私もやりましたよ。こんな黒パン、全部海に投げつけましたよ、本当に。港から二、三十メートル離れたところ、港の岸壁を離れば戻すことはないだろうと思って、黒パンを捨てましたよ。

それで、やっとナホトカの外海に出たときに、あの日本海をこの船で渡れるんだろうか、さびだらけのこの船で渡れるのか、心配でしたね。それで、甲板に上がると、日本海の、あれはネービー色というんですか、海の色というんですか、あの色をこうやって甲板から見ていると、スーツと吸い込まれるようなんですよ。これはいかん、これはここにいたんじゃ危ない。たちまち下へおりましたけれどもね。あれは本当に気持ち悪いです。栄養失調じゃなければ何でもないでしょうけれども、気持ち悪いです。

そうこうしているうちに、船の中で「第一次片山内閣の組閣がありました」という放送が艦内にありまして、片山内閣ができました。舞鶴水道に入りましたら、舞鶴は京都ですけれども、水道のわきに山がありますよね。山にかさをかぶった女の人が、草刈りか麦刈りかよくわからないんですが、ずうっといるんです。それで、向こうで、かまでこうやって手を振ってくれているんです。それで、

ああ、やっと日本へ帰ってきたんだなと思って。

いよいよ下船、小さなタグボートに乗っかってみんなで行った。私もそうですけれども、乗船して上陸ですよ。上陸の第一歩、国防婦人会か愛国婦人会か、その辺はよく記憶にないですが、要するに白いかつぼう着の奥さん連中がいっぱい出迎えてくれているんです。それから、「こういう者は知りませんか」「こういう人は知りませんか」と盛んに私らに聞くわけです。ところが、上陸してくる兵隊はみんな黙って、幽霊みたいに物も言わないで上がって来るわけです。

後で聞いた話ですが、ソ連に行った兵隊はみんな洗脳されちゃったんじゃないか。笑いもないし、口もきかないし、みんな、ぼおとしたまま帰ってくる。何を考えているんだか全然わからない。というようなことで上陸しまして、頭からいきなり粉をバースとかけられまして、それから消毒薬が入ったお風呂へ入れられて、三回ぐらい風呂へ入って、それで、上から下まで全部新品を支給さ

れまして、青畳の上に寝たときには、これは経験者じゃないと、なかなかあの感触というのとはわからないんじゃないか。青畳の上は実に気持ちのいいものでした。

それで、少し落ちつきまして、やっと復員、内地へ帰れたからと、うちへ電報しようと思ったんです。うちへ電報しようと思ったら、電報は一週間かかりますよと言われまして、一週間かかるんじゃない、私らは四日あればうちへ帰るんだから、じゃ、電報はやめようと。それで、帰りまして、一人三百円ずつくれるんです。貨幣価値がわからないものですから、日本はすごいな、戦争に負けでもまだ一人三百円もくれる。昔、私らが兵隊に行く前は三百円といったら大変ですもの。三百円もくれた。それで、喜び勇んで舞鶴から東京行きの列車に乗ったら、京都へ行かないうちに三百円なくなっちゃった。だから、京都の駅からうちへ帰るまで一文なし、全部もう一銭もありません。ただ、復員証明だけありますから、それはもう家

へ帰ることはできませんけれども。

そんなようなことで、電報を打ちませんでしたから、家へいきなり帰りました。そうしたら、六月十四日、ちょうど田植えの時期でしたから、うちのおふくろが孫をおぶつて庭にいたんです。私が黙って帰ったら、びっくりしまして、幽霊が戻ってきたと思ったらいいので、もう栄養失調ですから細くなっちゃっている。例によって物も言わないで、にこりもしないで黙って帰ったものだから、幽霊が帰ったきたというようなことで。

田植えの時期ですから、みんな田植えに行っちゃうわけです。そうすると、私一人残っているわけ。そうすると、もう赤飯なんかがあると、おほちを抱えて食べたんです。食べちゃいけないよと言われたんですが、何か栄養失調の人が帰ってきて一週に食べると、みんな青膨れになって死んじゃうから食べちゃだめだと言っても、みんな田んぼへ行っちゃうからだれもいません。私一人だからだんだん食べる。そうしたらぶくぶく太りまし

て、えらい太りました。だから、うちの人が心配したけれども、それでも何でもなかったです。

何でもなくて、会社にあいさつに行きましたら、何か知らないけれども、えらい宣伝されました、ソ連から物すごいのが帰ってくると宣伝されましてーわかるでしょう。ソ連からすごいのが帰ってくる。ちょうど私が兵隊に出るときの工場長が専務でナカジマさんという人がいまして、その人が面接してくれたので助かりましたよ。じゃなかったら、私は大物ですから、もうすっかり洗脳された共産主義の大物ですから、そういうふうに宣伝されたわけですから。ですから、だめでしたね。ところが、専務がいたものだから助かりました。本当に私はまるつきり反対です。ですから、わかってくれて復職したというわけでございます。

ちよつと長くなりましたけれども、とにかく戦争はやめましょう。戦争をやるのなら勝ちましょうというものは不謹慎だから言いませんけれども、戦争はやめましょう。本当に悲惨でございます。

今のイラクを見てもわかるように、戦争は本当に悲惨です。ですから、何としても戦争はしないよ
うな方向で頑張りましょう。